

# 資料紹介

常民文化研究 第二卷(二〇一三)

## 吉田三郎『我田引水』(第三章～第六章)

今井 雅之

本稿で紹介する資料はアチックミュージ엄同人、吉田三郎が執筆した小説の復刻版である。本資料にかかる解題・復刻に際して・関係資料・小説本文の第二章までは、『常民文化研究』第一巻に掲載されている。

### 《凡例》

- ・本書は吉田三郎著「我田引水」に校註を施し、復刻したものである。
- ・「我田引水」は、一九四一年四月から一九四二年三月にかけて、全十二回にわたり雑誌『博物』に掲載された小説である。
- ・復刻にあたっては、底本として中道琢郎氏(著者の次女の夫)が保管するもの(以下「私家版」と呼ぶ)を使用した。
- ・「私家版」は、著者が生前に全十二回の連載をスクラップして一冊のノートにまとめ、自ら装丁を施したものである。この「私家版」には、著者自身の手によって手書きで加筆・修正が行なわれている。

- ・復刻にあたり、著者の子孫である吉田総恵氏(著者の長女)、吉田総耕氏(著者の孫)とともに内容を検討し、必要と判断される語句については新たに註を附した。

- ・著者の追記部分については以下のように処理した。

- (1) 誤字の訂正や表現の修正を意図したものについては、著者の意を汲みその通りに修正した。

- (2) 語句の註釈を意図したものについて。

- ① フリガナの位置に追記されたものについては、同じ位置にカッコ書きで記した。

- ② 文末に追記されたものについては、カッコ書きで記した上でゴシック体とした。

- ・その他誤字であることが明確なものについては、著者の子孫と協議したうえで校訂した。ただし著者独自の語法・表記である可能性が残るものについては手を加えていない。

- ・本文中には現代の価値観からすると不適切な表現が含まれているが、

歴史資料としての価値を重視し修正していない。



寒風山（今井撮影）2019 年



延命寺溜池（今井撮影）2019 年

### 第三章

#### 一

それからはずと目を覺ました時は體全體が馬鹿に暑くなつてゐたし、同時に脇本驛を出る十二時半の汽車がボオウと太い大きい發車の汽笛を鳴らした。太陽は頭の上を少しだけ西によつてゐる。私は、ああ良い熟睡だつた。これで一週間も満足に眠らなかつた全體の疲勞が幾分快復したんだなあと思ひながら、やつとこさあと立あがり、そして直ぐ水揚げを見たら百桶位は溜つてゐた。何んだこれ位かなさけねいなあ、これなら今日は樂なもんだと、ひよつと上田の方を見たらその時私の全身を躍らすものを覺えた。

これは幸だ。私の寝てゐたのを知らずに、私が居らぬと思つてか、上田の人々は自分の水揚げをそのままにして、晝飯を食ひに行つて居なかつた。呑氣な奴等だ。この三つの水揚げを破つて來れば、俺は晩まで一生懸命汲み出す程の水は溜るんだ、と喜び勇んで走り出した。そして一番上の水揚げから順序に、ドウと破り流した。何んが良い氣持だ。水と一緒にガブガブ、流れて行きたいやうな氣持である。自分の水揚げの水が惜しかつたら着いてをれば良い。俺らどうでもかうでも水さへ出にかかれればそれで父母は喜ぶし、他人は水のある田を見て羨み、そして氣がきいてゐる、百姓が熱心だと誉めてくれるんだ。俺ら學校の先生から教えて貰つた事とは反對なんだ。と私は全く心の底から喜んで、またひと奮張り水を掻き出した。飯なんか念頭にない、かうして考えながらも、五十、百だ、と一寸腰をのさう、さてまたやるぞ、一つ二つ三つ四つ五つ、と勘定して、

百毎に一寸腰をのして休しみ、そしてまた一滴も無くなるまで汲み出した時は、もう日は村の上まで下がつてゐた。三時半頃だらう八百五十の時三時の汽車が出た。あれから百五十、三十分はかかつてゐる筈だ。全部で千桶汲んだなあ、田はどの位水がゆき渡つたか見ようと、水揚げから這ひあがつた。そして田の畦を渡り見て廻つた。然し全部で千五百の桶で汲んだ水は僅かに小さい田が二枚、一寸五分位の水が溜つてゐるに過ぎなかつた。だがそれでも他人の田に比較して、多少水があるので私は嬉しくてしようがなかつた。この時ばかりは、犬も歩けば棒にあたる、稼ぐに迫付く貧乏無し、の語句を本當だと感じた。

さてこれから俺ら水揚げにじり水が溜つた處で大した事もない。一つこれから歸つて晝飯でも食つてこようと思つて上田の方を見たら、彼等三人は矢張り田にきて田を廻つて歩いてゐた。私は直ぐまた胸が鳴つてきた。彼等にやられはしまいか、遠廻りでも別の道を行かうか、腹は空になつた。どうしようかとまごまごした。けれども結局私は、男は度胸、女は愛嬌だと言ふ譬喩を信じて、若し殴らうとして來れば、すかさず逃げることに決心してその水路に添ふて行つた。けれども彼等は別に何んとも言はないし、殴らうともしなかつた。私は全く酷暑の時急に冷風を送られたかの如き感を覺えたのであつた。全く安心して歸り、飯茶碗に食ひついたが、何んだか彼等が私を殴らうとしなかつたのが、何故か不思議でありまた不安でならなかつた。然しどうすることも出来ない、飯を食ひ終つてから再び汲み出しに出掛けた。

二

彼等の田の側まで行つたら、彼等三人は私の破つた水揚げをまざまざと見ながら、何にか話込んでいた。私を見るなり

「三しゆう先づ話があるから、ござさ來ま」(來たまい)

と言つた。私は今度こそやられるんだと思つた。すると先刻の冷風は吹き飛び、再び酷暑はやつてきた。私は其處でまごまごして

「何が用があるのがなあ」

と全く逃げ腰の構えで訊ねた。

「相談があるんだから、けつたらけ(來いと言つたら來い)」

と言つた。けれども私はどうしても側に行く氣は起らない。

「一寸の用なら其處ねるで話してればいいでね」

と私は言つた。

「ああ、そででは、三しゆうだでい、俺等晝飯食つてゐるまに、水揚げを破つたのは。それで話があるつてもここさ來ねんだなあ。」

「ああきつとさうだべ、三しゆう。水揚げを破つても俺等は何んともさねがら、安堵してござさけでは、今夜の水引の話があるがらなあ」

と彼等は語りながら私をどこまでも來いと言ふのである。私はやや安心して彼等の處に行つた。そしたら彼等は、

「先づござ腰を下して休しめでは、うん」

と言つた。それが非常に素直な言葉である。私は愈々安心して腰をおろした。

三

「なあ、三しゆう、話ていふのは、今夜の水引の事だ。俺等と一緒に<sup>フドジ</sup>なて、水引をやるがやらねが、うん、其腹をきぎでんだよ」

と問ふた。私は其處で、

「水引の事だらどんなごでも、無條件に賛成だ。ふどちにやらなければ手合ひでおがむで」

と答えた。

「その事をこれがら相談するでね、そいで雨は何時降るが解がらねし、そいにひめでもの頼みであつた延命寺の貯水池<sup>チヂシ</sup>の水も、あの通り今日から果田に通し水だし、吾々には一滴の水も田に掛がらぬもの、そいに話に聞くと明日も矢張り通し水だといふ話だ。さらひはあの貯水池も明日でもうしつかり無くなる譯だ。あの貯水池の水が無くなれば、假令一滴の水も吾々の田に掛がらぬ事になるべ、さうなると吾々の田も只見て殺すより外にない。だからひめで四五日も田の面を濡して置く内に何にが何んでも天は吾々を殺さず雨を降らしてけるべひ。んだがら今夜の一時頃にあの延命寺貯水池に行つて番人の長助老人に銘酒「城の菊」の一升壺を抱かれでなあ、ひめで二時間も水口をしつかり開けきつてどつと流しんだなあ、あの水を二時間も吾々の田にどつと入れるんだら、大抵田に水はゆき渡るべひ」

と三人の内の一番口達者な忠助親父は言ふのだつた。

「さうだでなあ、果田のふとがだもかうして二日も通水にしてで

も貰わねば、田植が出来ぬいがらなあ、無理もねい。どうでもかうでも植ゑでさいしまえば、死ねば諸共、といふ譬喩のある通り、諦めもつくが、なまかも植ゑねいでしまつたつて、小作米の半分は何んなことがあつても泣えでもぼえでも取られるがらなあ。それ油断しねで一人二圓三圓出し合つても、柏金にくぐり込んで通し水にして貰うのはあだりめいだなあ、そいがらあの貯水池に關しての土方の普請には矢張り吾々と同様な勞働力を出し合つてあるんだから、そいは正當な水の要求は出来る筈だべとおいだば俺ならさう思ひ

と新三は言つた。私は黙つて聞いてゐてから、然し吾々は合點がいがね。元來あの貯水池の出来る前から、あの岩清水を水源として吾々の田が開かれてゐた筈だ。だから貯水池がなくなつて平年なら大丈夫吾々の田は實る。それだけあの岩清水水源に關して自然的な原始的な依存關係つまり既特權を持つてゐるのだ。其處へ持つてきて段々下々の田が開拓された。それでも通し水田時代なら吾々の田の投げ水で充分間に合つてゐたものだが、時代の進展と共に農業技術の發達を見品種の改良多收穫をモツトウとして、乾田耕作が宣傳實行された。其處に當然時間的な水の必要性を感じ、とくに貯水池擴大工事が斷行され、其の時、天まかせの果田の連中が加つた。その時この水に對して既特權利を持つてゐる吾々の祖父達の賛成を経ないで決議されたことは事實だと聞いてゐる。さういふ關係で一定の期間だけ前田八千刈はお客分として、貯水池工事の普請への勞働力も、またその經費上の割前も取られなかつた。それさえも遂ひ

二年前から、色々な手段で果田と同一な立場に置れた。そこまで運ぶにはどんな政治的な策動が行はれたかは吾々の知る限りではない。さういつた關係でほんとに大きな目で見ると、こんな場合に、勞して効なしは吾々小作人ばかりだ。果田の連中だつて、一旦田植してしまへば一定の小作米は取られるにも拘はらず、百姓といふ者は其處へ行くとほんとに利害關係を離れて百姓道に立歸るものである。全く妙に出来てゐる。だから今夜の水盗みも、盗みでなく、正常な要求なんだ、といふやうな事を話した。

「それはその通りだと思ふ。そいでは今夜の二時頃行く事に決めで、さて、酒は一升なんぼするがなあ」

と長松は言つた。

「なに城の菊は一升一圓だ。そいに菓子五十錢も買つて行つて、俺らもいつちよろ（一緒に）なつて）に呑んだり食つたりするでは、んでもあの番人の長助老人は一人で一升も呑まねば、氣が遠くなつて、一時間のものを二時間も心良く流してけねと思ふがなあ。何んとだべなあ」

と忠助は言つた。

「んだべなあ。そいでは俺ら少し呑んで菓子を食ひ、長助さ盛んに呑まひで、早く酔はしてやるでは、處で一圓五十錢は都合悪い。一圓六十錢にして一人四十錢づつにしたら何んとだ。いべひ、どうだがな」

と新三は言つた。一同それは良いと賛成した。近年來貯水池の水は日中流して、夜は番人を置いて止めることになつてゐたためにこ



の相談も出来たのである。

「そいでは夜の十二時頃矢張りとしごき集まることにするでば、そして酒と菓子とは忠助親父に頼むがら持てきてけれ、俺等その時金を集めてやるから」

と長松は言つた。

「それが一番早い。どうひこうひ忠助親父家には酒と菓子は買つてゐるがらな」

と新三は言つた。

「うん。俺らとの相談はするがこの年として、夜水など盗んで引でどて歩げるもんでねい。俺らは来ねい。その變りおいの忠一をよこすから其處おめ方良く相談してやつてけれ、忠一はまだ學校卒後だから何にも解がらね、んだから良く教ひてやつてけれ、水だけなら平等に分けてやつてけれ、こいだけ願うで」

と忠助親父は言つた。新三と長松は中年だが私と忠一は若い方だつた。かうして今夜の相談は定まり、彼等は歸つた。私は今一頑張りしてじり水を五十でも百でもかき出さうと我田に行つた。水は矢張り幾等か溜つてゐた。私はまたそれをかき出した。そして私は考えた。と言ふよりも、苦痛を感じてきた。それは今夜の四十銭の金をどうして工面すれば良いかであつた。彼等は小作兼自作だから、それでも餘程俺家よりはゆとりがあつた。だから日中の水引もこせこせしないでお互に今夜の事を念頭に置いてゐたらしい。私はどうせ四十銭を父から貰ふたつて父は心良く返事はしまし。大體父にだつて四十銭は持つてゐないだらう。大變だなあ、どうしようか、と

私は頭を悩ました。じり水は何時の間にかかき出されて無くなつてゐた。幾つあつたか勘定もしない、只四十銭の金をどうするかが頭一ぱいであつたからである。

#### 四

日はもうとつくに寒風山に落ちて、寒風山の上が紅色を呈してゐるのみであつた。歸り遅れた鳥は急いでカアカア鳴きながら神社の杉森に飛んで行つたり、また腹一ぱい魚を食ひ、今頃やつと八郎湖から、大きい白い羽を心ゆくばかりのぼした一對の白鳥は高空飛行をして、眞山本山のお山の方へ行つた。夕方の村は一人騒がしく聞えてくる。子供達が走り廻る、馬のいなく聲等々が夕飯時の煙の中から、かすかに見えたり聞こえたりしてくるのであつた。私も早く歸りたい、然し約束の四十銭が心配でならない。どうしようかと考えながら我家から立ち登る煙を見ながらのこのこと歩き出した。

ふと私はいい事を思ひついて、良い考えだ、と一人合點した。なに、これから急いで歸つて、父母にかくして、米櫃の中からカント米(外米)を三升程盗んでこれを米屋に持つて行つて賣り、その金で今夜の支拂としよう。これで工面がついた。自分等の取つた米も食べないで、自分の田の米を賣り、その金で安いカント米を買つて食はねばならぬ百姓は馬鹿正直だなあ、こんなうまくない直ぐ腹のへるカント米は嫌だ、そのカント米まで四十銭の金の工面のために、三升程盗まねばならぬ現在の吾身を見凝めて悲しまずに居られなかつた。兎も角もこんなことを考えながら私は家の前まできた。

父は馬を水に入れて洗ふため澤の池に行つて居なかつた。妹達は力を合せて夕飯の支度を終つて食ふばかりになつていた。母は明朝の飯の支度をするため、本家の井戸端で米を洗つたり、馬鈴薯を捏鉢に入れてゴシゴシ洗つてゐた。これは幸ひだと、大急ぎで足を洗つて妹の學校道具を包んで歩くく四角な風呂敷をこつそり持ち出した。米櫃は墓所<sup>(46)</sup>と床の間の間<sup>(47)</sup>にある物置きにあるのだ。だから墓所の方から入ると具合が悪うい。床の間の方から入らぬと駄目だと思つて、墓所の方の入口の障子を閉めた。弟妹は爐端で口遊びしていた。柴の曲つた奴を取り出してきて、六七寸に折つてその曲つた方を上にして、下の方を兩手で合せ持ち、そしてくるくる廻して、その曲つた先の方が誰れかに向けばその人は尻をふつたといふ遊びである。

「カラス、カラス、だい、尻たいだ」<sup>(48)</sup>  
と廻すのである。

これに彼等は一生懸命である。私は、如何に我家の物を盗むとはいへ、一旦盗む段取りになつたら、矢張り足はびくびくふるへ立ちどうしても全體の平均を保ち得なかつた。然し心臓の音は大して高くもなかつた。どうやらかうやらふるい立つ足を自制しながらやつとの事で、米櫃の處にたどりついて手早く風呂敷をひろげて舛で三つ計り取り、風呂敷の四つ隅を一緒に丸めてからその内片方の隅の方で二回程ぐるぐる縛り、そして自分の寢室に持つて行つてかくした。これでほつと安心して、足のふるへも戻つた。これで直接父母に嫌な顔をさせないで、併も仲間人が出来て、明朝にはまた喜んだ父母の顔が見られるんだ、と思ふた時は三升のカント米も盗んだ

のは罪でなく盗むだけまだあるのは却つて有難く感じてならなかつた。それから務めて平然と弟妹と一緒にたつて爐端に座りカラス、カラス、とやり出して笑つてゐた。父母はその内に仕事を終つて墓所にきた。久し振りでみんなと一緒に夕飯を食べることが出来た。そして色々父は、今朝の事件から、今日の水の具合を私に聴き、私は有りの儘を答へ、久し振りに父の笑顔を見た、三本松田に除草の出来る程水がかがつてゐたためだつた。

「もう小駒の水はあれきりだ。二番除草は出来ぬべきつと。貯水池の水ももう手に入らぬべしと、困つたもんだ雨が降らぬくて」

と父は言つた。私は今夜のことを話込もうとも思つたが、すすれば四十銭の出所をただされては大變と思つたから、口に出たが押さへつけた。何れ明日水が田にかかつた時でも遅くはないと思つたからだ。かうして夕飯は終り、私は寢室に入り本を読み出したが、少しも頭に入らなかつた。今夜の事、それからどうしてこの目の前にあるカント米を賣つたら良いか等々がどうしても頭から離れない。それでどうせこれを早く賣つてしまつた方が安心だと思つて、三升の米を俵に入れてぶらり家を出た。

## 五

米屋に行かうか、菓子屋に行かうかと考えた。米屋に行けば少し安しいがそつくり現金で貰える。菓子屋に行けば米屋より二三銭高く賣れるが、其の代り菓子を十銭以上買はねば具合が悪ういし、菓子屋の者共は先づ最初に何を買ふのだと聞かれるから、どうしても

菓子を買はねば米を買つてくれとは言えない。さうだ矢張り米屋に行かう、と私は決心して二町程離れてゐる米屋に向つた。若し米屋の店に人でも居れば具合が悪るいから、店に入る前に大體の様子を見るため板戸の節穴へ右の目をつけ、腰をかがめて覗いて見た。この米屋の特長は夕方になればもう全く店を閉め切つて板戸を立ててしもうのであつた。だから若者等でも其の外一般の者が雑穀を盗んで賣るには好都合に出来てゐる店だつた。店は眞暗で誰れもゐなかつた。私は安心したが、然しほんとの安心でなく、あたりに人が見てゐはしまいかと、心を騒がし、目を左右にくばり、そつと入口に走りより、急に戸を開けた。そしたら戸に附けてある馬の鈴がガラガラガラン、と大きい音をたてて鳴り響いた。私はこの鈴の音ではつと胸を打つて一足後へ戻つたが、思ひきつて聲を出して呼んだ。

「めひ(店)に來てくれい。めひに來てくれ。めひに」と二度半も呼んだら誰か墓所の方から來た。しかし私のかうして呼んだは決して高い聲ではなかつたから、多分店の者も私の聲を聞いて店に來たのでなく、前の鈴の音でちゃんと店に人の入つたことを知つて出て來たらしかつた。

眞暗な店に蠟燭に火をつけて右手で持つて板の間をばたばたとのろくやつて來たのは米屋の主人の妻で馬鹿に横に太つた女だつた。村人はこの女を称して「南瓜」と呼んでゐた。この型の女が村には其の當時三人程あつたので、その屋號をつけてゐた。三仁兵家の南瓜。小間物家の南瓜。米屋の南瓜等であつた。殊にこの米屋の南瓜は何處か血の廻りが悪いのか、顔が何時も青ざめて時々腫物など

することがあるので村人は特にこの女を「米屋の腐南瓜」とまで非道い呼方をしてゐる。その南瓜が薄暗い蠟燭を持つて私の目前に現はれた。この腐れドフラは蠟燭を、何石と入る長方形の大きな米箱の縁に横にして蠟をなだれこませ、その上にそつと蠟燭を立てから、薄氣味の悪い目付で私を見て

「何用あるのげ」

と言つた。私はつとめて落付き拂つて

「なに米三升程買つて貰えでいかなあ」

「なに米だて、三升ばし今時の若者が𧄾の三斗も四斗も持つてこねが、辛棒な若者コだなあ。手拭の被りあべ(鹽梅)ばかり良くて」

と言つた。この南瓜全く私をひやかしてゐるのか、おだててゐるのか解からなかつた。そしてにやりと全く味氣のない笑をした。

「うーんと、カント米だて」

と私は言つて思はず下を向いた。

「何んだ其のうつま(32)また地米でなくカント米だてが、あぎいだなあ。(33)良い若者コだがなあ。今しがた初四斗程持つてきて賣つた若者がるだよ。お前の家にだつて𧄾はあるだべひ、𧄾の方は賣る人も良い金になるし、また買ふ俺家でも儲けがあるがなあ、カント米だと大した儲けがねいものな。さうだべこのカント米ももとは俺家から取替に持つて行つた米だものなあ」

と南瓜は言つた。これはいげねいなあと私は不安になつてきた。

「𧄾は少しぐれあるにはあるが、それでも今日は忙しくて盗まい



ねかたものな。あどに持つてくるがら、今夜のこの米何んとか買つてけれ」

と私は願つた。

「それあ商賣だから買うには買うが、安しで、それでも良ば買つてやらよ」

と南瓜は言つた。

「良いよ何んぼでも、そしてひば、一升なんぼするし」

私はやつと頭をあげて言つた。

「さうだなあ、地米なら一升二十銭もするがカント米は一升十五銭しねよ、十三銭位のもんだよ、それでも山盛三升あれが四十銭に買つてやらよ」

私は急に心臓が打つてきた。山盛三升あつてくれれば良いと、必死となつて心の中で願ひつつ、無言でカント米を南瓜の手に渡した。

南瓜はそれを受取り、一足も歩けばある舁を、歩きもしないで全身を横にして手を差し延べ、ガランと舁を引よせた。そして側の米箱へ前かがみになつて私の米を計り始めた。私は手に冷汗を握つて呆然と見てゐた。南瓜は薄暗い箱の中へ鼻汁を二つ三つ落しながら米を計り終り。

「こゝらの通り山盛三升あるで」

と言つて私に見せてくれた。その途端に私は今までの一切の苦痛から脱れ、ほんとにほつと腸が急に軽くなつたやうな思ひであつた。

南瓜は全く歩くのが嫌さうに、のたりばたり佛壇の前の長方型の箱錠を開けて金を持つてきた。そして蠟燭の火の元で一銭銅貨五十

枚を丁寧包んだ中からヒフミシゴログナナヤコノトと十枚勘定して自分の右手に持つて残りの紙包みを

「こいに四十銭あるがらなあ」

と言ひながら私に差しのべた。私は喜んでそれを右手に受取り固く握つて其處に置いてある風呂敷を左手に持ち、

「良がつたなあ。まだあどに。」

と挨拶して後も見ずにガラガラガラン、ギュツと板戸を閉めて一目散に吾が家に歸つた。

## 六

臺所に行つたら、母は田もんぺの破れた所を繕うてゐた。父は市町村雑誌といふ奴を見てゐた。父は私を見て、

「寝れ。寝れ。朝に起れねくて困ら」と言つた。

「ううん俺ら十二時頃小駒の田に水引に行くものひば四人で相談してあるものひば」

「何に、何處に引く水があるもだて、貯水池には番人が居るし、行くだけ損だ。止めで寝れ、寝れ」

「んにや。駄目だば駄目でも良い。相談してあるもの行く處までは行つてきたほうがいべひ」

と私は何にか自信のある言い方をした。その内に九時は打つた。

まだ早いので私はまた寢所に入り、石油ランプの下で、石油箱の机にもたれながら書物を読んだが、然し直ぐ眠くなり兩手を組んで顔を伏してゐたが、それつきりうたたねしたらしい。ふと母は高い聲

で私を呼ぶのはつと目を覺ました。

「今何時頃だ俺らきどごね<sup>(54)</sup>していだのかなあ」

「今十一時打つたばしだ。寝るならランプを消して寝るもしねで危ぶねで、若し火事でも出れば大變だで、そいこそ根こからカマドがけつてしまうで」

と母は注意してくれた。十一時打つたとすれば、さてこれから出掛けなければならぬ。私はランプを消して寢所から出た。

「んがひば。ほんとに行くてが、氣付けであげ、あまち(怪我)などさねよにほら」

と母はまた注意してくれた。

「あやまだひそくたらごど、(ああそんな事)百も二百もおべいでるで」

と私は言ひながら土間に下りて、ハバギを巻き、足半を履いた。鍬を持たうと馬屋の前に出たら、赤毛の愛馬は、ウフン ウオウと叫びながら私の方へ長い顔を振りながら出してよこした。私は心の中ではたまらなく可愛いと思ひつつも、一般の口癖で、

「なにこの畜生。何んば食はひでもこえねで」(ふとらない)

と言ひながら、兩方の手でひと抱え切り草を持つて、行つて、馬のタゴ<sup>(55)</sup>に入れてやつた。馬はうまさうにしゃくしゃくと音を立てて食ひ始めた。(未完)

## 第四章

### 一

家の前は眞暗闇の廣い廣い田圃である。相變らず果田の方には水引の人々の焚いてゐる赤い火があちこちに見える。更らにその向ふの拂戸村の電燈も何んとなく淋しく光つてゐた。八郎湖を越した湖岸一帶の村々の電燈も遠く光つてゐた。私は、例の場所に急いで行つた。

豫定の場所に近づくと、私の足音を聞きつけて、向ふから

「三しゆうだが、三しゆう」

と忠一の聲らしい聲で叫んだ。

「おいだよ」

と私は答へて歩いてゆくと、黒い影がかたまつて三つ動いてゐた。「はいなあ。馬鹿にはいなあ。まだ十一時半頃だべひ」

と私は言つた。

「十一時半、何がいが、んが(汝が)おひのだ」

と長松は寒さうな聲で言つた。

「さうげ、さうげ、そいでは御免してけれ。そいではしぐね腰をおろさねで行ぐでばな。あい忠一持つてきたべ。俺ら落しと大變だから銭<sup>ゼン</sup>コ直ぐやるで、こら、とてけれじゃ」

と私は銅貨の四十銭を忠一に手渡した。

「何んだ銅貨か、重いなあ、こんだらものがであぐに困るであ。

こいよりねがたてが」

忠一は銅銭をシャツの袋<sup>#ケツト</sup>にねじ込んでから。一升壘を私に差し

のべた。

「そいでは、こいをんが持てあべ。菓子俺が持て行くわんてが」

「うん、そいでもい」

私はその城の菊一升壺を左手に持ち、鍬を右手に持つて四人はそろそろ出掛けた。

「あの長助老人、いあべにだまがしきでければ良いかなあ新三は同じ村だから、だまがしきぐがもしいねで。てもどね。<sup>(36)</sup>いいあべにだまかひやじゃ。」

四人はそんな話を話しながら、然も雲をつかむかの如く漠然たる氣分を浮かせて、足にまかせ目的の貯水池へと暗い夜道をどだばだ歩いていった。

## 二

五町程で村に入る。村は全く森閑としてゐた。音一つない。只聞えてくるのは、道側の家の柱時計のカッチン、カッチンが低く聞えるのみだつた。二三町行つたら、右側の澤の方の或る家の方で、大きい軒が、ゴウ、グン。ゴン、グウン。と聞えてきた。これは深夜を破る凄軒である。

「だいだてあいは。ひでなあ、あでもなもね、ふとだな。（誰だあれは、非道い相手にならない人だ）」

と新三は言つた。

「うん、うん。あいが。あいは、善行法師だよ。あのはな音でおら方の村では有名な男だ。奥山で梨畑の番して夜中にああやるか

ら、にしゅびどもおかねがねで（盗人も恐しがらないで）香氣に梨を盗んで歸るで話だ。そこから土佐犬の大きい奴をたでんだ。その代り、狐や化者<sup>バク</sup>は犬よりも、そのはな音が恐しど見であんまり出ながつたといふ程だがらなあ」

と忠一は言つた。

「良ぐまあ、あんな八ヶ間敷し側であはなど寝てゐるもんだなあ」と私は言つた、その高い聲が聞えなくなつた頃に俺等四人は、神社の前に出た。神社の入口の側の店にはまだ薄明るい石油ランプの光が見えた。

「なんだ十二時つけがもしいねに、まだこの家では寝ねのがなあ。何にしてるんだべなあ」

と新三は尋ねた。

「なにこととどこ（蠶）を養つてゐるがらだべひ」

と長松は答えた。そして入口のガラス戸から家内を見ないで通れば良がつたが、ちらつとひと目、奥座敷の中央に吊されてあるランプのあたりを見てしまつたのは忠一だつた。俺等三人は何心なく通り過ぎさうとする時、忠一は私の後から肩の邊を二三度引張つた。私は一寸驚きながら忠一の方を見た。忠一はなほも私の肩を左手で握り、そして引張りながら鍬の柄を持つて、薄暗いランプを見よと指した。私は忠一の指すランプを最初に見た。

「何んだい。ランプが珍しいが」

と私は平素のより少し低かつたと思つたが、忠一は

「いやまでそんな高げ聲を出しなでは、あらあのランプの右側の

とどこの箱のそば見れま」

と忠一は極めて低い聲で言つた。私は教へられるままに眼を大きくして見た。そしたら若い男女が二人何にか私語やいてゐた。女は少し笑ひかけて自分の手もとを見ながら、ジャンギリ、ジャンギリ、桑を切つてゐた。男は腹這いになつて妙な手つきをしてゐた。これを見た忠一は動けばこそ、水引の事などつくに忘れたかの如くである。長松と新三は三十間も行つたが、私共が遅れたのをそれと知つてか、それとも自分の村故前々からさうしたことを知つてか、長松は戻つてきた。新三は一人他村の者故その辺でぶらぶらしてゐたらしい。

「何に見てゐるて、えめぢ<sup>(58)</sup>(貯水池の名)まで行かねでその菓子食ふ心算が」

と長松は勤めてこれも低い聲でそらとぼけて言つた。そして私共の側にきて矢張りランプを見た。そして動こうともしない。然し彼等の甘い私語は決して聞えては來なかつた。だが彼等の動作に依つて、忠一も長松もそして私も益々興味といふか昂奮といふか、何にか言ひ知れぬもののために、全身は磐の如くなつて彼等の其の後の行動を頭に描き出しつつ凝視してゐた。忠一と私は全く未知な世界にでも出たかの思ひで、彼等の動作を物珍しく併もおもしろく見てゐた。其處へ新三が

「この馬鹿方、何に見でゐるて。さあ早く行くよ」  
と矢張り低い聲で言ひ乍ら近よつてきた。すると長松は新三に向つて

「あの馬鹿方の仕業を見てゐるのだが、もう少し辛棒して見て居れまあ」

と言つた。忠一と私は、長松が今少し見ておれといったのが物足らなく、一時間でも二時間でも見てゐたくて仕様がなかつた。然し長松は萬事心得てゐたらしい。

「あんなもの何に珍しもだて、さあ、さつきと行くでば、んがばら」

と新三は向ふを急いで仕様がなかつた。

さうしてゐる内に、その女が立つてつかつかと、ガラス戸に向つてきた。すぐ俺等は逃げ出してこそそと神社の入口の前のアマ犬<sup>(59)</sup>の影に長松を一番先きにして逃げこんだ。見てゐると彼女は古ぼけた幕をガラス戸に閉めて行つた様子だつた。長松は忠一向つて「あの節穴から覗ぞで見でけま」

と言つた。忠一はこそそそ行つて矢張り節穴へ右の眼をつけて、何回も覗き返してから歸つてきて

「誰れだと思つたら籠屋の職人だ。あねちやがこつちの方に入つたら、あの籠屋も後について入つていたよ。あいなとしらあぢだて」(あれをどうするのだらう)

と斥候兵の忠一は部隊長の長松に報告した。

忠一の報告したこつちの方とは神社道に面した物置きのある。私共はもう駄目だと思つてほつとなり水引に行かうと立ちあがつたら

「んがばら、一寸までま。えがばら二人こそそと其庭に行つて、

鍬で軒板を破れるだけ叩えで逃げてけま」

と長松は命じた。忠一は無論私も一つの好奇心にかられた。

「こいはおもしろいな。したら三しゆう二人でやて見るが」

と忠一は私を励まして先きに立つてこそそと忍び足で行了た。私も忠一の後に付いて行つた。「息を呑んで」といふ言葉があるが、私は其の時始めて息を呑んでゐた。私の心臓は十分弱いとみえてまた音が高くなつて來た。それでも我慢してやつと足は軒板の三尺近くまで近付いた。その時忠一はもう一足出ようとする瞬間に私は先づ鍬をうんと差し延べて鍬の頭で續けざまに思ひ切つてといふよりも、夢中になつて續けざまに四つ五つ軒板を叩いてから逃げ出した。忠一は私のため機先を取られたので、びくつと驚いたらしく、私より二つばかりおくれで矢張り五つ程ぶんなぐつてばたと逃げた。逃げる時の氣持はまた悪くないもので、何にかしら氣持ががらつと開いた様な思ひだつた。アマ犬の處に置いてあつた酒壺は長松が持つてにげてゐた。忠一の菓子箱は新三が持つて逃げてゐた、然し一同は決して遠くまで逃げて行かなかつた。道路に面した店の角の、即ち、アマ犬の反對側の角の處で私共を待つてゐた。そして私が逃げ行つたら、私共の方に二足三足長松が進んできて

「先づ待てま待てま、んがばら」

と私共をさへ切つた。其處で私と忠一は止まつて落付き拂つた。其の時二階に寝ていたアネチャの父母と言つても良い爺さん婆さんであるが、この婆さんは二階の部屋から隣り軒へ聞えるような凄じやラ聲を出して叫んだ。

「ヨネぼーよ。ヨネ。誰いだてそれい。家やぶる者。家やぶられるてもお前黙つてゐるが、何處の畜生だ。面見てけい。ヨネボーよ。何處だてそれ壊した處」

と叫んだ、次ぎに爺さんはいたつてのろいで婆さんに話掛けた。

「惡戯も事飲げる。家壊しよな事するもんだてか、人馬鹿にして、何處の馬鹿けだべい」

と言つてゐた。

「ヨネボーよ。今何時頃だて、まだ桑ひば切り終らねでかただが。何してゐだで、早くやて寝れ、寝れ、ヨネボ」

と婆さんはまた言つた。その時、ヨネボのアネチャは、ランプの邊から務めて落付ききつたやうな調子で、そして言葉途切れとぎれに、答えた。

「なあーに村の若者方、うーと惡戯してが、誰がだが外だけ暗くて解がらねでい。オガア、別に軒板は破れねども、俺ら飛あがつた。なあに、桑切り終つてとどこにやるべと思つてゐだ處だで」

婆さんはまた

「今ひば何時頃だて、ヨネぼよ」

「十二時過ぎだべひ」

とアネチャは答へた。

「今夜まだどうしてそんなにはがどらねが、たてひば、ヨネぼ」と婆さんは尋ねた。

「んだたてひば、今日の桑が悪るかつたもの。オカア。それに浪子の小説を少し讀んだもの」



アネチャはさう答へてゐる。その時側の新三は、「こんなもの見て聞てゐたつて仕様がねい。さあ行ぐでば、水引にきてこんな遊びしてゐだつて、田に水は一滴も入らぬ。それにこの酒と菓子を投げにだつて相當時間がかかるし、そひば其の内に夜が明けるでひば、あべでば」と落付きなく催促した。

### 三

「それもさうだなあ、さあそれでは行ぐでば」

と長松はすぐ賛成した。私も忠一も、其の後の跡を知りたくてたまらなかつたが、然し心の底には必死となつて引かねばなら水引の事がひかえてゐる。我に歸ると何に後日またあんなことがあるかも知れない、と一縷の望を抱いて私は長松や新三のあとに付いて歩き出した。

「さあ急いで行ぐでば。こんどは二十分はかかるよ。石に足の爪先を打つけねで氣つけで、あべよ」

と新三は親切に注意してくれた。そして歩きながら今の事件について語り出した。

「籠屋の職人はあれあ、あの店の人達と同縣人で話だ。それで近くなつて遊びに行つてゐるんだべ、どうせ婿に貰ひば良いでねいが」忠一はさういふ意見を吐いた。「ふうが、あの醜男め。矢張り山形縣の者が。なあに。あのアネチャは誰れでも良いが、婆々は貰つたて長くはおがねいもの。大體もう五人貰つて出した處だべ、酒

呑み婆々氣むちがしいからなあ」

と私は言つた。

「なにあの婆々婿を貰つて直ぐ追出しのは、一種の手だよ婿を長く置くと誰れも村の若者が遊びに行かねし、遊びに行がねば店の食物が賣れねべひ、何時だつて秋になれば、あの店で田も作つてゐない癖に、靱を十何袋と馬車に積んで靱摺工場に持つて行ぐもの。だから一年通じて獨身者にして置で日數が多いものその方が婆々酒多く呑めるべひ」

と長松は話した。

「おやおや、これは長松も曲者だなあ、これあ人一倍菓子を食ふ長松だもの、いいくひ者。ハハハハ」

と新三は笑ひながらからかつた。

### 四

やがて村道を通り過ぎて田圃道を七八丁程奥に行つた時、大きな高い土堤に突き當つた。土堤の左側の山よりの凹んだ處に直經六尺位の丸さに杭を七八本立て、そして上を一緒に縛りそして藁の苫をかけた小屋がある。それが水番の小屋であつた。その小屋の前に恰も鑑の光りの如く淋しさうにポポつと燃えたり消えたりする焚火の小さなかたまりがあつた。俺等は高い土堤を登り始めた時

「長助老人焚火ばかりして歸つてゐれば、俺らこの酒と菓子は丸もうけだがなあ」

と長松は低い聲で話した。

「何に居ねいもんか、眠つてゐるべし」

と新三は言つて、其の内に小屋の前に出た。

「酒と菓子はこの小屋の前に置いてば、んがばら」

と長松は私と忠一に命じた。私共は命ぜらるままに其處に置いた。

新三は小屋の所へ行つて

「やあ爺ちや、居るがなあ、寝てゐるがはあ。俺等遊びに來たがなあ、居るなら起きれば」

とさう聲をかけた。けれども長助老人はうんともふんとも音一つ出さない。

「これは不思議だなあ」

新三は私語きながら前より大きな聲で

「長助爺でば。寝たふりしねても起きれば、俺等だけ狐であるびし。<sup>(61)</sup>ほんとの人間だで、おいどご解がらねてが、んん爺ちや」

新三は小屋の入口に吊り下げてある蓆の戸をまくりあげて腰を少しかがめて頭から先きに入つて行つた。そして手探したらしく

「何んだ爺ちや居るでねが。ねたふりしがて、何に狐だつて、化けるには猫が居れば駄目だとが、と昔から言はれてゐるが、おら長助爺ちやも、これあ狐以上だよ、猫寝が上手でなあ」

と新三はからかつた。その時始めて

「なにこの馬鹿けがた、今時こそそけちがて水でも盗むどもて出はて來たべ。水もあした一日きりで、俺いも今夜限りだもの、何にゆつくり寝てゐるだ處だでね」  
と言つた。

「ああ、さうげ、それは初耳だ。さうひば水は明日一日流ひば無くなる譯だなあ爺ちや。いたわしなあ。どうだ爺ちや俺らどご全く助けたと思つて、一時間でも良いから流してけれがなあ。うん爺ちや、駄目だが、流ひじや」

と新三は言つた。

馬鹿、馬鹿、そんな馬鹿話するもでね。こんなごと、柏金さんに聞けだら俺ら、ひげもり、（水番人）、止めさひられるで、ひば俺ら明日の日から口して、（口に入れものがなくなる）しまうべひなあ。したらんがばら食わひでけるげ」

と爺ちやは言つた。

「爺ちやよ。世の中で馬鹿正直にばかりしてゐだつて、糞の役にも立たねもんだ。この水これ程あるて、柏金でもまた別の重立者が來て印でもつけて行つたげ、印でもつけて行けば別だが、そんなごどでもしていねば、たつた一時間位流したつて解るもだてか。どうだ、かうして手を合ひで拜むよ。ちや、人を助ける神様になつてけれ、神様になれば、御酒もあがるし、また菓子もあがるし。そいがら俺ら四人で手を合せて拜むもの、なあ良いべ爺ちや」

と長松は全くうまい處を言つた。その時長助老人は酒の香をした勢かそぞろに態度が化けて嫌でもないような聲を出してきた。

「良い、いげ口だなあ。誰いだてそいは、うんアツハハハハアハハハ」

と言ひながら笑つた。その時、私は無論一同も、これはもうしめたものだど七八分通安心した。

「さあ、田の神様さ御酒と菓子あげれ。あげれ。ここに田の神様があるが持て来てあげれ、んがばら」

と新三は私共に命じた。私共は手早く酒と菓子を手探して見つけ、そして新三の手に渡した。新三はそれを受取つて

「さあ、爺ちや。今夜は田の神様になつてこの一升壺に口をつけてあはれ。なあ良いべ爺ちや」と長松は言つた。

「はて大變になつたもんだ。こんな事は出来ねいがなあ。そいがいつて持つて来たもの戻しのも、まだいげな(えんぎ)が悪るいし。まあ、まあみんな戴ふ、そいでは」

と、とうとう長助老人は田の神様になりすましてその御酒と菓子をみんなして戴けと、言つたのは全く、吾々も救はれたような氣がしてほつとした。

「矢張り長助爺ちやはものの解つてゐる人だなあ。これだから番人をやて貰てゐるもの。田の神様だけあるなあ。そいではこれは絶對秘密だよ、なあ爺ちや。たつた一時間だけだ」

と新三は言つた。

「そいではほんとに一時間きりだよ。新三行つて流せであ」

と神様は宣言した。新三は恰も飛び立つように水口の方に下りて行つた。私と忠一はぼかんと暗闇の中を見てゐた。

「うんやんさ、この畜生、中々抜けやがねであ、全くかたく蓋をしやがつて取れねであ。うんうん」

と一人で呟きながら力んでゐるのがきこえてきた。

「おうい、誰れが鍬を持つてけじゃ。蓋が抜けねいんだで鍬の頭

でぶなぐねば駄目だ」

と新三は言つた。それで私は急いで鍬を持つて外へ出た。

新三は膝頭まで水に入つてゐた。

「おお、三しゆうだが。まだ水落口の穴が二つある。これなら二時間位流してもかまわねでこれあ」

「さあ、その鍬頭で、水落口の蓋を力一ぱいぶなされよ。一方にばかり叩かないで兩方から代り代りになあ」

と言つた、私は教へられる儘に眞暗闇の中にも更らに蓋の黒いのに見當をつけて、鍬を中段あたりまで振り上げて力を入れてなぐつた。その途端に、ビシュツと水が私の全身に飛びかかつた。はつと思つた時同時に側に居つて見てゐた新三が

「あつぷう。ひでい三しゆう。水かげらいじゃ。そくたらごとしで叩だて何にもならね。まだ若げものなあ。知らねべ、こらかうして叩くもだで」

と新三は私のそばにきて、私から鍬を受取り、そして鍬を振上げないで、蓋から二尺位の間隔で、水の中で頭を蓋に向けて力一ぱいに打つなぐつた。そしてまた反對の方から同様にしてやつた。

「三しゆう。そら大抵動ぐべ。動かして見れま。少しでも動いだらこんど力一ぱいに何回も動かひば、直ぐ抜けるもんだがらやつて見れまあ」

と新三は教へてくれた。私はその通りに水に手を入れて動かして見た。成程動くのである。それから力一ぱいに動かしてゐると直ぐ抜けた。私が一本の蓋を抜いた時には、新三は早くも次ぎの一本も

手早く抜いてゐた。同時に二つの水落の穴から、ゴウ、ゴウ、ゴウ、ゴウと音を立てて水が流れ出した。穴へ手をやつて見ると渦巻をなして勢強く流れてゐて私の手が底へ吸ひ込まれさうであつた。その感覚も又言ふに言われぬ良い感覚である。

「ああ良い氣持だなあ。やつと流れだじや。この分で二時間流ひば、四人で割つてもかなり田にかかるよ、さあ小屋に行くべ。俺ら腹がばつとあいだようだ」

と新三は言ひながら上の方にあがりかけた。私もそのあとに付いて行つた。

## 五

小屋では長松と忠一と長助老人と三人で、小屋の前に火を少し焚き、その火を中心にして吞んだり食つたりしてゐた。私共が行つたら、

「ああ御苦勞、御苦勞、骨折らしたなあ。まあ火にあだりながら一ぱいやれでば」

と長松は言つた。私共も場所を見て自分の鍬を横にして、その柄の上に腰をかけた。そして火を自分の方に掻き出して濡れた足を乾し温めた。火の熱は上の方までのぼつてきて氣持良かつた。

「さあ。俺いばし吞んだてうまぐねい。んがばらも一べ吞めでは。いえ」

と長助老人は段々と機嫌を良くしてきたらしく、大きい水呑碗を新三に差し出した。新三は受取り、向ひ合になつてゐた長松は一升

壺を握つて、新三の持つてゐた碗へ注いだ。半分位入つた時、新三は

「ああ。こいで澤山だ。こんだに吞むと歸れなくなる。そいよりも爺ちやうんと吞めでは、うん」

と新三は止めさせ、そして碗を頭の上に戴くと口をしぼめてシート一口吞んだ。

「おお、んめい酒だ。長助爺ちやのお蔭で俺等かうしてんめい酒が戴げるのは幸ひだなあ長松、んがばらもさうだべさ」

と言つた。

「その通りだよ、これは神様だもの、さあ新三早く吞んでその碗を三しうに回せ」

と長松は言つた

「んん。俺ら酒は一口も吞めぬもの。その代り菓子なら戴ぐが、かまわねでくれでば」

と私は言つた

「おんや。今の若者こは大抵酒吞めぬものなあ、だから度胸もねいし。またびくびくして夜這にも行けぬものなあ。アハハハ、アハハ」

と長助老人はとめどなく言つて笑つた。

「ところが酒も煙草も吞まねがらとて、別に金を蓄めた人もざらには居ねし、俺らこだらごどして若い時がら酒も煙草も肛門脱タシコげるだけ吞んでも、矢張りあばも子も食わひねで置がねがたがらなあ。そひば吞んで樂んだ方が徳だよ。一ぱい吞むと元氣が良くなり、足

の向く儘に夜這こき、家の親父と取っ組みまでしたもんだで、この年齢なつても一ぱい呑めばその氣が起きでくるでば。ああ今夜はおもしれであ」

と長助老人は頗る上機嫌である。新三は呑みほして長助老人に腕を渡して、なみなみと注<sup>ツ</sup>えて呑ませた。まだ壘には半分位残つてゐた。

「さあ水は相當流れて行つたよ。俺等もこれで先づ御免貰て歸るでば。なあ、んがばら」

と新三は言つた。濡れた足は何時の間にか温く乾いてゐた

「先づ良ねが、もつと呑んでゆげでば、俺ら一人では呑み切れねでみなあに流いだ水は何處さものがね<sup>(62)</sup>べ、んがばらの田に入るべひ水の流れは見てゐれば早いようだが、人間と歩き比較すれば人間に負けるもんだよ。まあもう一ぱい飲めでば、んがばら、うん、この酒なとして。」

と長助老人は腕を今度長松にのべた。けれども長松も矢張り飲めない方で、やたらに菓子ばかり口に運んでゐた。

「俺らなんか、酒見ただけで酔つてしまう方だ。助けたと思つて飲まひねでけれ、どれその代り、俺らもう一回爺<sup>ぢや</sup>に注えでやらあ」

と言つて長松は壘を新三から受取り、またなみなみと一ぱい注えだ。そして腕を長助老人の側に置いておいて立あがつた。

「さあ、そいではこの位にして戻るべ。爺<sup>ぢや</sup>、あと頼むよ。ほんとにありがてがたなあ」

と長松は言つた。私も忠一も長松に真似て

「それでは爺<sup>ぢや</sup>、何んとか頼むよ。ゆつくり朝までかがつて飲んでけれ」

と言つて立つあがつた。

「爺<sup>ぢや</sup>、そいでは今一時間も経つたら忘いねで水落口に蓋をしてけれやあ。頼むよ。酒は一人で飲みきれながつたら、隠して置えて明日また飲んだ方が良いだべ。爺<sup>ぢや</sup>全く良かつた。助かつた。矢張り田の神様だ」

と新三は言つて立ちあがつた。

「んがばら、矢張りゆぐてが、ゆつくりひば良いの、俺らも今夜は近頃にないい氣持になつた。お蔭様で、有難でい。有難でい。」

と長助老人はかなり酔ふたと見えて充分に舌を回し得ないやうだつた。

「そいでは爺<sup>ぢや</sup>、必ずだで、一時間半もしたら止でけれよ、なあ爺<sup>ぢや</sup>忘いねで。」

と新三は繰返して言ひながら、土堤を下り始めた

「それでは、今寝て休めじや」

と長松も私も忠一も同様に言つて別れ、新三のあとについて下り始めた。そして水口の下までくると、水は矢張り勢良く、ガワ、ガワと音を立てて流れていた。



## 六

「大分時間は経つたべ、一時間近くなるかも知いねで、水を落してから。」

と新三は言つた。

「何にまだ三十分位のもんだべひ。あの長助これからまた一人で、つむり、つぶり飲んで居れば、止めるのも忘れて朝まで流さぬとも限らね。さうひば却つて俺等の方で氣の毒だなあ」

と長松は言つた。

「それもさうだなあ、まあ急いで田に行くべ、そして水を田に入れてからまた、一相談しるごどだ」

と新三は言つて、どんどん急ぎ足で歩き出した。

## 七

元の所へ歸つて來るとこの水の分け方も別に正式に別けもしないで、只良い加減に分ける事にして、各自各自の田の畦を渡り、そして水の配流をして歩いた。そして私は或る田の水の加減を見るべく眼をつけて、手で探ぐつてゐたときである。急に田面が黄色に明るなつた。

私は全くはつと驚いて、夢中に空を見あげた。その時かなり大きい火の玉が、餘り高くもない空を東の方へ飛んで消えた。私は急に全身に寒氣がして直ぐにでも後の腰の邊が掴まれさうになつた。けれども私は咄嗟に考ひ直した。何時も見なれてゐる流星とは尤も違ふが、然しこは世間の人々の言ふタマシ、では決してないんだ。と

威張つて見たが矢張り心の底は恐しくて仕様がな。水の加減はその儘にして飛び立つ思ひで彼等の居る方へ走り出した、彼等三人は既に長松の水揚げの處に腰を下して矢張り今の火の玉の事を話してゐた。

「ああ、おかね。おかね。今の飛んだ奴は一體あれは何んだべが」と私は彼等の側に行つて聞いた。彼等も矢張り人のタマシだと言ふ。

「タマシなど居るもんでねい。と今時の若者は何時も言つてあるが、矢張りタマシがあるのは本當だ。俺ら生れて始めてだが」

と新三は眞面目に語つてゐた。然し私はそれでも何んだか本當には思はれなかつた。

「いやさう言ひば、本當かも知れぬ。昨日の朝平太が鎌ちゃんくんを殺し目に合せたといふ話でねいが。あの鎌ちゃんくんはあれで執念深い男だがら、きつと、自分の果田い水を見るに行つたんだで。ああ」

と長松は言つた。

「さう言ひばほんとに果田の方に飛んで行つたなあ」と忠一は成程らしく言つた。（未完）

## 第五章

### 一

來る七月一日當部落有人足と重箱一壺

で午前十時迄に當寒風山頂に御参集下さい、大旱魃のため雨乞を致します若し登山しない者は清酒一升を呈出する事、また必ず各自藁一把づつ御持参のこと、

六月二十九日

部落代人

部落民各位様

古新聞紙に墨黒々と筆太に書かれた右の様な告示が四五枚村の各店の戸板に貼られた。これは鎌ちゃんくんの事件後一週間後のことである。愈々自分の村でも雨乞をしなければならぬ程に水に困ってしまった。それでも他の村よりは二週間も、三週間も遅れてゐるのであつた。他の村では、やれ石地藏さんを田の泥に埋めたとか、泥を塗つたとか、或ひは龍が主になつてゐるといふ一の目(63)にまで夜に馬に乗つてお願ひに行つたとか、或ひは藁で大きい龍の型のものを作り、それを新タマと言ふ水の涌き出る池の所に置いて來たり、それぞれ、その村に依つて異なる方法で雨乞をしてゐた。

昔からこの大倉村で雨乞をしさへすれば必ず雨が降ると言つてゐたので、右の様な告示が貼られ、他の村人もこれを見て、愈々大倉村でも雨乞するやうになつた、今度こそ雨は降ると、喜ぶのであつた。同時にこれは他の村ばかりでなく、私の村の若い男女にとつて喜ばしいものの一つであつた。殊に私などはほんとに水引は厭きて

しまつてゐたから一日も早くその日が來てくれれば良いと思つてゐた。隣近所の主歸達は、告示の出た日から井戸端の話題は、雨乞當日の重箱の中味を何にして行けば良いかで持ちきりだつた。

「隣のアバア。雨乞の日何を作で(つけ)行ぐげい」

と一人が言ふと、

「俺ら家では親父が眞餅(マモモチ)が好ぎだから、眞餅にコシアンをつけて持つてゆくでね」

と對手はさう答えた。

「俺ら家では今年餅米が不足で、春の祭に赤飯を挟んだばちとよに残らね。残つたあじはお盆の赤飯に是非ともしねばならぬし。だから親方それシンコ餅を作で矢張りコシアンでもつけてあべと言つてゐるだから、そいにする心算でゐるだあじ」

と向ひ隣のアバは言つた。

「俺ら家では今年餅米ただの一粒もね。春の祭には、買て來て赤飯をふかしたし、まだお盆にも買はねばならぬし、何時もならこだ事二回三回あてもひいで、(深山)餅は掲げる程米は残して置だもんだが、なんとして、去年の秋地主から手紙ときて、さんでめ(小作米)の半分を餅米にして持つてけてなあ、俺家の良人餅米は食ふだけよりねて、手紙とやたばまだ返事來てなあ、んがばら食はねても持てけてほんとにほら、無理矢理に取らいだよなもんだ。んだらんだいに(さうならさうと)高げ餅米を持て行たら、粳米(クリゴメ)の値段と比べてそののぐりの金でもまだ、俺ら方さよごしが(65)ど思たら、目腐金一文けねもの(66)。俺家の良人、あんな我儘な地主あるもでね、ああ馬

鹿臭ひ、とくだらまでかだあじ。<sup>(67)</sup> だがら粳米のヤマ餅（普通の飯を搗いた餅）でも搗で、ツブシ小豆でもつげで持てあべて、今朝そなごどさべ（喋）てかだあじ。そいに俺ら家ではみな眞餅より、ヤマ餅の方が好きだものが」

と私の母は語つてきかせた。

「そいでは銘々違ふもの、山さ行てがら盆にふとつづつやりとりするでねなや。お前方」

と隣りのアバは言つた。

「こんなごとは毎年あるものであるびし、五年にふどげれ<sup>(68)</sup>十年に一回といふ處だべひ、だから家さ錠かげでも家内中ありだけ行た方がよいべみなに米櫃の米打つ賣ても、まだ一枚きりよりね着物質置でも、まだ、金貸してけるふとら借金しても、良い料理を作で行くでねなや、お前方」

兼て放慢生活してゐる向ひ隣のアバは本當のところを言つた。

かうして村の主歸達は、全く其の日から重箱の中味で苦心してゐるのであつた。

若い娘や嫁達は、まだそれぞれその日には何を着て登れば良いかと、田畑に行く時一緒にあつても、その話で持ちきりだつた。

「ミサ子。お前方ひば何に着て行くけ」

と隣の嫁と言つた。

「もう夏だもの、ハンテ（肌襦袢）の上は、一枚よりね、銘仙の襦袢でも着てゴロ（メリンス）の腰巻ながめで、襦袢のをしばちよて、それにがば下駄（駒下駄）でも履で行く心算でゐだ」

とミサ子は答えた。

「アハハ、エート、俺ら見だいな嫁こだけ、何んとして、そうやおばごこ（さういふお洒落）して行がれるもだてひば俺らだば矢張り他人の前あて、そうやおばごこも出来ねものなに緋の半纏にもんく、らもんべでも履で、その上にひめでゴロの帯と前垂でもすべで、地下足袋履でも行くと思てゐだでね」と私の本家の嫁こは言つた。

かうして若い女達は自分の着て行く着物を決定していた。そして女達ばかりでなく若い男達も矢張り話合ひこそはしないが心の中では大體決めてゐた。かうなると却つてこんどは水引の心配よりも割合ひに妙なそわそわした心忙しく二日の日を十日も先きのことでも待つやうな、遠い思ひをして待ち暮した。

## 二

斯くてその日は來た。雨乞をする日ではあるが、今日一日の晴天だけは望みこそすれ決して嫌な思ひはしなかつた。私は普斷より一時間も早く起きて馬の草刈りに行き、朝飯も食はずにどつさり二束刈つた時は八時頃だつた。母は朝からせつせと支度をして、私が仕事を終つたらヤマ餅を搗けと言つた。

「何んと腹が減つて餅搗く力がね」

と私が言つたら

「そいでは、そらこの鍋に附だ飯のコビ（焦げ）でもふと握り食ひであ、こらあ」

と母は氣をきかしてよこした。私はそれに薄黒い三等鹽を少しふ

りかけて息を吹きかけながら一口々々口に入れるが満足に噛みもしない内に咽喉を通り越して胃の腑に落ちて行くのであつた。かうしてむさぼり食ひをしてから母と二人で餅を搗いた。餅を搗き終つたら母はそれを一握りづつ臼から取り出して、ツブシ小豆を入れてある鍋を側に引きよせ、一つ一つその中に突込み、そのツブシ小豆をつけて、それから重箱に詰めた。私はそれを見て直ぐ掴み出して食ひたくて仕様なかつたが、考へ直して、こんで食ふより山の上で腹一ぱい食つた方が徳だ、待つまでの楽しみと思つた。けれども元來甘物好きの私はせめて砂糖の入つたツブシ小豆でも一寸食べたいと思つて、鍋の側に近より母に無斷で右手の人指と中指を二本突込んでそれでしゃくつて、手早く口に入れた。そしたら母は私の顔を下から見上げて、

「この畜生、卑しくてまあ」

と叱られた。けれどもその小豆を食つて見たら叱られる程の甘味がなかつた。むしろ、三等鹽をふりかけた握飯の方がうまい様にさへ感じた。

「母でば、これひば砂糖何んぼあでひだあじだて」<sup>(69)</sup>

と私は聞いた。

「小豆五合に黒砂糖五錢<sup>ゴシツ</sup>あでひだでね。んまぐねてがひば」

と母は答えた。

「何んだそくたばし」<sup>(70)</sup>。五合の小豆にごんじゆあでの砂糖では、ひだもひねもわからねよなもんだ。ひめで十錢あでもひればなあ、あじも良がたがな」

と私は言つたら

「何小言よてゐる。食ひでやるもおきだこと。(食はせてやるのも有難からずに)五錢あでだてひねよりは、んめべひ。砂糖など一塊もひね(入れない)で鹽ばかりひだ(入れた)小豆アンをつけてゆぐふどが何人でもんだで(何人もあるのだ)我儘よてけつがて」

と母は言つた。私は母のこの言葉を聞いて非常に情けなく思つた。一年に何度も食はぬこの餅に、せめて口の中が溶け込んでゆくほど砂糖を入れて食ひたいもんだ。何んのために吾々が夜から夜まで汗を流して働いてゐるのだらう。最も食ふためばかりに働くのではありませんが、然しこんな事は毎日あるでなし、それに砂糖がこの世に餘計無ければ別だが砂糖は澤山あつて、そして食ふ者は二度三度の食事に折りまげて食つてゐるではなからうか。馬鹿らしいもんだ、百姓は。辛いもんだ百姓は。情けねいもんだ百姓はと私は茶の間のあがり段に腰をかけて考え込んだ。その時

「さあ、んが、まがなて(まかなふ―支度して)この餅を背負つて先ぎなて行ていれじや。俺いはこの料理をあとがら持て行くがら。ささどいげ」

と母は言つたので、私は寢所に入り支度をした。腕付の新しい縞のシャツに、脛コモンペ(股引)を履き、その上に父が若い時着た紺の手刺しの半纏を着て、その上に皮帶をしめた。金のあるはいかな芸者は地下足袋を履いて行くが、私には元よりそんな良い物はないから足半(アシナカ)にした。そして新しい柄のついた手拭を頬被りして、といふ恰好である。父は早くから藁を持つて行つて

色々と山の上の準備をするために出て行つてゐた。私は母の包んだ餅の箱を手持つて出掛けた。早いのか遅れてゐるのか村内を通る時是一緒になる人も居らなかつたが、村端れに出たらもう五人三人或ひは十人と列をなして、各自背負つたり持つたりして歩いてゐた。その内早い人達は寒風山の中腹あたりまで登つて黒く小さくなつて見えてゐた。私は二丁程先きを歩いてゐる五六人の人達に追い着かうと足を急がした。着いて見たら友人の耕三や仙太などであつた。

「やあ早いなあ。てもどがだ」

と私は後から呼びかけてほへんだ。

「やあ、來だが、來だが、これでも俺ら遅い方だで、今日は天下暗れての日だ。おもしれなあ」

「そででは、そででは、今日こそ思ひ切つてやるでば、山を汚さねば駄目だで話だ。山を汚ひばそいで始めて神様が汚を洗て流しどて雨を降らひるでいふ話があるからなあ」

と私は祖父から聞いたそのまんまを言つた。

「何んと三しゆう、なんだからごどもおべであるねが」

と仙太は褒めてくれた。彼等の服装は矢張り私と良く似てゐたので私は心ひそかに安心してゐた。そして、お互に、俺ら家の料理は何ふの、餅は何ふの、またお前の料理や餅は何ふの、或ひはまた雨乞終つてから直ぐ家に歸らうとか言つてゐた。

### 三

海拔三百四十米の寒風山は、私の村からは三十町三十間あつて、

女や子供が下駄履きで歩いてても一時間で山頂に達する程極めてゆるやかな女性的な山なのである。だから話をして歩いてゐる内にもう中腹の梨ノ木平に登つてゐた。こまで登つてしまへば松林も無くなり、其處まで林の間からちらほらより見えなかつた南東の景色が一時にぐつと開けて吾々の目を驚し、そして幾分汗ばんだ身體に高冷の風がそよそよと食ひつくのである。だから登山者の全部は先づこゝでかなり重くなつた腰を芝草の上におろすのである。そして第一回の精神爽快をかなり強く味ふのである。だが登山者の癖として先を急ぐ氣持が多いので、せいぜい十分位休んでまた登り始めるのである。そしてこの山の最も良い特徴として、中腹以上は全山芝草で頗る女性的な美しい曲線に當んである。絶頂を目掛けて而も一步登るにつれて、縦横の景色の度が廣くなり、従つて精神的な爽快の量も多くなつてゆくといふ、誠に妙な山なのである。だから中腹から山頂までは全く他の山では味ひ得ない特別な氣持で、何時歩むともなく夢の如くに身は山頂に運ばれてゐるのである。他の山では一度登るともう二度と登る氣持の起らぬのに比し、この寒風山は毎日登つても決して飽きのくる山でないであつた。山頂には石の祠一つに石地藏さんや石碑が二つ三つあつた。石の祠は藥師様で効驗顯著と言はれてゐる。だからこの寒風山の内でもこの嶺が一番高いし、そしてこの部分を藥師長嶺と村人は呼んでゐる。傳説に日本海を通る船がこの藥師様の威光にふれば即座に船は止められ、何うしても動かなかつたといふ。かうした効驗顯著な藥師様を絶勝の寒風山頂に祀る大倉部落は幸福であつた。だから大倉村さへ雨乞をや



れば必ず降るといふ他村の噂もあながち嘘の様でもなく一應はその信仰をも認めた上での事であらう。

もう午前十一時頃である。村人の大半は集まつてゐた。思ひ思ひの集團を作つて、心ゆくまにそれぞれ各自各様に、高冷な風と絶妙な景色を味はつてゐるのであつた。

「やあ早いの、やあ遅いの」

とお互に言葉を交はして、私も或る一點の場所を見つけて餅の箱を置き、そしてこんどはゆつくりと腰を芝草の上に打ち投げた。少しは汗じみた體も、手拭でふきとる必要もなく自然に乾き去つた、雨が近くなつたり、秋にでもなれば、山頂からの眺望は一層絶佳になつて遠く南は飛鳥から、北は青森縣の黄金崎あたりまで見ることが出来るが、この日はそれ程までではなかつた。然し鳥海山は、一名秋田當士とまで言はれる程に、良く當士山にその型が似てゐた。この日も秋田當士は中腹のあたりからほんのりと姿を現はしてゐた。寒風山頂から見る秋田當士は、伊豆大島から當士山を眺むるのと良く似てゐた。東には奥羽山脈が連綿として聳え、その前には八郎湖が楕圓形に横たはり、白帆の潟舟は漁の關係か、恰も炎天の大グラウンドで集團體操でもしてゐる如く綺麗に列んで居る處もあり、また三三五五になつてゐる處もある。何れも思ふ存分に帆に風を受けてゐると見えて、横に倒れかけてゐた。八郎湖と奥羽山脈の中間の田圃の中を湖岸に添ふて、南から北へ北から南へと急ぐ旅人を乗せて走る汽車は時々白い煙を長くなびかせてゆくのであつた。八郎湖より前は廣い廣い田圃で吾々の生命は無論、中央までも進出してそ

の名聲を高め、併してその生命をも助けてゐる、その尊い米の出来る田圃が、平年なら一樣に今頃は青々と恰も青湖の如きものであるのに、不幸にも今年は區々である水のある田は青々と、水の無い田は薄黄色をして、はては無情にも全然赤くも青くもない、即ち打ち返されたそのまんまの黄黒い残骸をしてゐる處さえある。これを見た時は爽快な気分も吹き飛び胸がふさがる様な思ひだつた。眼下に見える近くの畑はこれまた色とりどりの作物が、半死半生の間で立つてゐるのであつた。西の方には、眞山本山は奥ゆかしく聳え、流石は官山と言ふてゐる如く、全國有名な秋田杉の大本が一本一本はつきりと見えてゐた。この山のために荒れ狂ふ廣い日本海も二分されたかの如くなつて、北と南にはつきり分れてゐるのであつた。

その北海に突き出た入道崎の大きな燈臺は白く日光を反射して見えてゐた。彎曲した海岸線は美しくゆるやかに遠く能代方面に続き、その處々に漁村が光つて見えてゐた。南も矢張りさうである。たゞ眠下の船川港はぼつぼつ近代文化を流し込んでゐるであらう。赤い屋根、青い屋根黒い屋根白い壁等々が見え、その手前には大きな黒い石炭の山がぼつんぼつんと見えるし、海には長い長い防波堤が突出し、その中に勢良く二三の汽船が黒煙を吐いてゐたし、その汽船の間に舳が小さい發動汽船に引張られながら、ぼつぼつとやかましく音を立て、動いてゐた。またその荷物を陸から陸へ運ぶ汽車は、どたばた音をたて、曲りくねり秋田市の方に行つたりきたりするものであつた。一方西の直ぐ眼下には年代不明の噴火口が二つ居ならんである。

第一次噴火口とかいふ處はかなり廣い野原の様な型である。これを村人は、京の町と呼んでゐる。太古にこゝは人里であつたとか傳説されてゐる。その角端には鬼が積んだといふ全く近代文明の機械力を應用してさへもどうする事も出来ない程の大石が山の様に積まれてゐるのである。その中には大きな立派な部屋があると噂され、又何んな日照りでも水が湧き出るといふ、石に掘つた穴がある。これを解して硯水といふこの大石の山を村人は、カクレザトと傳承してゐる。その南横には第二噴火口があつて、これはつひ數百年前までは水が満々とたゞへてあつたと傳承されるが、目下は乾いてほんの少し其の形跡があるばかりである。また其には風穴もある。この全山が全く青々と芝草に覆はれ女性的であり、その眺めは素晴らしいものであつた。更に又古い傳説を尋ねるなら漢の武帝がこの山に来て、羊を飼つたといふ話さへも残つてゐるその武帝はこゝに来てはるか西の空を眺めて、國に残してきた妻を戀ひ慕ひ、次きのやうな一首の和歌を作つたといふ

足曳の山の秋風寒き夜になほ妻戀の鹿ぞ鳴くなる

#### 四

村人の全部は登り終つて、各部署について命令一下何時でも重箱は開かれる準備をしてゐた。部落代人の佐藤憲二は叫んだ。

「お前方あ。こいから拜むよ」

やがて火は焚かれ、延命寺の和尚が肅然と石祠の藥師様の前に藁蓆を敷いて、坐り、やほら經文を誦ひ出した。五六人の郷長達は和

尚の偈に黙つて手を合せて拜んでゐた。それを中心に村人は圓を作つて拜む人も居れば、また立つて見てゐる人もあり、經文を聞いてある人もある。火はどんどん黒煙を立て、天に登つて行つた。盆踊りに使用する太鼓も叩かれた。石油の空罐も誰れが持つてきたやら、ジャン、ジャン叩かれた。あれやこれややかましい程で和尚の經文の文句は少しも解からぬ。石祠や石像の上には男鹿海産の今年の新ワカメを被せ、村人達は代り代りその上から水を絶えずぶつかけてゐた。石祠や石像の前には蠟燭が點され、白紙で作つた御幣を萱の棒にはさんで立てられ、それから平たい丸い陶器の器物に水を入れたのと、小さい長方形の平たい木の器物には、一日から三十日までの日數を書いた小さい紙片三十枚を一つ一つまるめて入れて供へてある。重箱の蓋の上には餅や、身ガキ鯨の昆布卷や、御神酒など雑然と供へてある。

暫して和尚は經文を誦読し終つた。郷長達や村人達は

「ゴデキサマ。御苦勞様。御苦勞様」

「ナモアマダブチ、ナモアマミダブチ」

「何んとか良くきくように」

「神様何んとか雨降らひるように」

等々と挨拶やら御禮やら願ひやら譯の解らぬことを言ひ合つてゐた。（未完）

## 第六章

### 一

「さあお前方<sup>イガタ</sup>。和尚方の仕事はこれで出来だがら、こんどは思ひ思ひに持てきたもの腹破えるだけ呑み食ひして、そいがら踊るなりなんとでも歌はしたり歌たり盛んにやてけれ」

と部落代人は言つた。村人は銘々思ひ思ひの場所に陣取り持参の重箱を開け始めた。子供等も日曜なので全部参加してゐた。だから四百人位の一部落の人々が一處に集つて祈願したり楽しく呑み食ひすることは或る意味に於て愉快なものの一つであることはきまつてゐた。そして大きな地球の模型にも似たこの一點にあつまつて、下界を見下しながら呑み食ひする有様は、全く悠然と見えるのであつた。また反面に於ては村人全部が食物を持ちより、青い芝草の上に静坐して和尚が讀經してゐるのを聴きながら合掌してゐるあたりは、さながらキリストの山上の聖訓の場面を想像させるものがあつた。

五六人の郷長達は、部落代人と和尚を中心に飲み始めてゐた。私は母と妹等と矢張り本家を中心にして隣り近所の人と同じ場所に集つてお互に自分の物をやりとりして睦しく珍しく誉め合つて食ひ初めた。

「んめいなあ。本家のシンコ餅はなんぼひば砂糖ひだべが」  
と私が誉めた。

「俺らはじんと家<sup>アザ名</sup>の、んま餅が好きだ」  
と本家のボーエと言ふ子供は言つた。

「ううん、よその花美して譬喩の通りでよくしたもんだ」

と母は言つた。

「んめいなあ。隣の家は景氣が良いなあ。身ガキ鯿に昆布巻、こいは良くこひだ<sup>(73)</sup>。なんとして」  
と本家のアバは言つた。

「何に松前さ鯿取りに歩く家だもの。鯿は買はねてもあるべひ。そいだもの、いいでね」  
と私の母は言つて。

「んだだて、それでもねであ。お前の家から貰たこの飛び魚が一番んめでね、こなあ」  
と隣のアバは言つた。

「なあに、こいだて買つたのでねもの。あびいぐ(都合よく)南磯<sup>(74)</sup>の親子から貰たのだものひば」  
と私の母は言つた。

「アラメのニンゼン(煮付。アラメの煮付のみをニンゼンと云ふ)がんめいなあ」  
「大根のデブがんめい。鯿の煮付がんめい」

「馬鈴薯<sup>アンデッ</sup>のニシメがんめい。鯿のしし(鮭)はまだ(愈)珍しじや。さあ飲めそれ呑めじや。にごろ酒も矢張りいでい」  
などと盛んにほめ合つて呑んだり食つたりした。大體腹九分通り

詰めた若き男女は、やがてそれ以上自分の家族の側で呑んだり食つたりすることは、おもしろくなくなつてくるのでぼちりぼちり場所を離れて他の組に出掛けていつた。他の組では、

「ああ、良ぐきたなあ。良ぐきた。さあ一べ呑めじや。さあ好き

だ物何んでもとて食ひであ」

と喜んで迎へてくれるのであつた。そして段々と賑やかになり、氣焰が上がり、ぼちぼち民謡が出てきた。私は野良犬の如く、あつちへ行つたり、こつちへ來たりして見て回つた。追分節をやつてゐる處もあれば、津輕節をやつてゐる處もある。さうかと思ふと小原節、或ひはクドキ節、オバコ節など様々でその文句は次ぎのやうなものだ。

惚れた振して、踏んだり蹴たり、しんに惚れたら、踏みあしね

女子<sup>オナ</sup>よいとて、けんたい振るな、小野の小町の末を見ろ

かたい定めは、いらぬものよ岩もくづれてじやくとなる

岳の白雪、朝日にとける、アネゴ結た髪寝て解ける

各自の身體に酒のメートルがのぼるにつれて、山頂のこの集團は刻々に狂態を演じ出した。酒の飲めない若者は角力をとり始めたり、或ひは若い男女の組々が許された天國の如く怪しい手付きで、突いたりして私語き合つてゐた。子供等はそれに興味を持つて走り回つてゐた。その時村でも強力で無茶な庸治は一人の吉助と言ふ少年を捕えて、手早く自分の股にはさみ込んだ。吉助は嫌だと叫んだが氣にも止めず、吉助の〇〇<sup>(76)</sup>を掴み出して、

「こらあ、見れ。んがばら食ひたくねいが」

と側に居つた娘や嫁こ達に見せびらかした。彼女達はどつと笑つた。吉助は大聲を出して泣いた。それでも猶ほ止めようとしないうで笑ひながら逃げまわる彼女達に見せようと、吉助を腕の下にはさみ返して、右手で掴み出して追廻しているのであつた。

「やめれい。康治の馬鹿。おどつらね（可哀さうだ）今親方達にごしやがいるで（叱られること）」

と中年女が叫びながら走りよつてきて唐治を引止めた。

「この馬鹿け良い年として、こくたら（こんなこと）して、ひ、ほんとね道樂者んだものなあ」

とその中年の女は言つた。けれども唐治は酒の息を吐きながら、知らん顔でやつと吉助少年を離してやつた。

村のアバ達はまたアバ達で、それぞれ何にやら語り合つてゐた。

「隣のアバでは、東家の八ちやんもこの頃急におばごと（お洒落）

やる様になたね。今年婿取るで話だが、ほんとだべなあ」

と一人のアバが言つた。

「ほんとだべひ、んでもあの娘は、嫁にやれば立身すると思ふが、家に置えだ處で、あの家など下リカマドで、何に四五年経てば駄目だで、俺ら家の親父がさう言つてゐた。そいにその婿になる若者も從兄だで話だ。そいでもあの若者稼げばいども、ほんとね、からびやみ（怠惰な人）だがらなあ」

と一人が低い聲で言つた。かうして他人の噂を氣に病んである一組のアバ組もあれば、また

「あら見れまあ。喜吉家のイミ子どご、あれだもの、松前でもどこでも男の後追<sup>ウツ</sup>て歩くでねなや。天の晝中<sup>フル</sup>ああして男さからがてるもの」

と一人のアバは言つた。

「そだごど、よう（云ふ）もでね。隣のアバ、うん、ここでの話、

親の十七子知らねで譬喩ある通りだ。おらだてほんとの處をしやべればあゝして遊んだもんだでね。なやあ、お前方。若げ時二度ねて、事もあるもの。うんと遊んだ方が良べひ。てで無し子のふとりふたりもたて何にひば」

と正直な金四郎アバは言つた。このアバは村でも一番ドケ（おどけ）者で通ふてゐるアバである。其處へ先きの唐治がのらゝと行つた。

「これあ、アバ若い時二度ねど、俺らうんと騒ぐでば、騒がねば雨降らねでこれ、どうだアバ。二人で角力取らねが。うん、アバ」

唐治はさう言ひながら金四郎アバの肩をぽんと叩いた。叩かれた金四郎アバは良い氣になつて、

「まあこの馬鹿け。ふとの前があでねひ。二人きりならど、うや角力でもとるがなあ。アハハハイト」

と笑つてアバは言つた。

「あら、徳二家のサメ子どこ見れ。腹に子ひで知らねふりして、親のよう（云ふ）通りに嫁なて行たが、戻されえできたでね、あら。そいでも、ふとの前も考<sup>ゆ</sup>けねでああして雨乞にくるものなあ」

と一人のアバが言つた。

「何にひば。サメ子をはらましたど、ぶでけい（狡い奴）はこの唐治の馬鹿けだべひ。なあさうだべひ」

と金四郎アバはこんど唐治の背中をぽんと叩いた。そしたら唐治は得意げにゲタ／＼笑つて、

「この馬鹿け。そんなごど大きな聲でしやべるもでね」

と言つて逃げ出してしまつた。

## 二

日はやや西海の方に傾きかけてゐた。村人の持参してきた物は、もう食ひ盡し、呑み盡くしてゐた。かうしてぎつくばらんに騒いでゐる内に、郷長達は和尚から何時雨が降るか確めて貰つた。和尚は最前石祠の前に準備して置いた御幣を手にした。だが手に持つた御幣はぶるぶる顫つてゐた。だいぶんメートルがあがつてゐたと見える。經文を誦読する時の様に整然とするのが當り前のやうだが、その時は胡坐をかいてゐた。墨染の法衣も何處かへ飛んでゐた。それでも先づ御幣を右手に持つて、丸い器物の水に、御幣のたれた部分を少しばかり浸して四方八方上下へびいびいと振廻した。そして最後に日附を書いた紙片の入つてゐる器物の中を御幣で左右に三回ばかり擦りつける様にはらつた。そして御幣を見ると紙片が三つばかりついてゐた。部落代人は脇に筆と紙を持つて待つてゐた。和尚はその紙片を手に取り、そして拜み、それから恭々しく開いて見た。一番最初に現れた日は、六日と書いたものであつた。和尚は聲を大きくして叫んだ。

「そら六日だ」

代人はそれを紙に書いた。和尚は次ぎ／＼に開いて読んでいつた。「二日だで、そいがら二十五日だで」

代人はその通りに書いた。郷長達は合掌して拜んでから一人は言つた。

「二日は明日で、降らねがも知らぬが、六日には降るよ必ず。二十五日まで降らねば、大變な事になる。若し六日も降らねばもう一度やり直しだ」

と言つた。そしたら和尚は

「それあ。神様嘘をつくもんだね。必ず降るからなあ。私が拜んで降らねてごどはねい」

と極めて自信ありげに大氣焰をあげてゐた。そしてまた飲み出した。この和尚大酒呑みで、村人は手に餘してゐるのであつた。それから雨の降る日が分かつたので、部落代人は一番高い處に立つて叫んだ。

「こらあ。お前方、良く聴げ。雨の降る日が分つたで、二日に六日に二十五日だ。んだから、こんどこの薬師様を中にして盆踊でも踊つて家さいぐごにするでい」

村人は一斉に拍手して

「ああ、良かつた。良がつた。ありがでもんだ」

と言つてゐた。

處がその内の一人が

「なんと照つた照つたあげくだもの、若し六日にだけ雨が降れば一日になんか止むもでね。きつと七日も降る。そうひば俺ら去年から今年こそ行ぐと思てゐた天王の祭がまだ見ねでしやう。馬鹿くひつたらあたもでね」

と利己主義的なことを言つてゐる娘も居た。間もなく踊の太鼓と石油罐は叩かれた。老人達は歸り出した。若い男女は

「何んと盆も來ねでね、盆踊は出來ね。そいにこの眞晝間中に素面出して歸られるもんでね」

と言ふ人が多かつた。それでも約半分は本氣になつて踊り廻つた。若い心ある男女はそれ〴〵、踊をそつちのけにしてあそこを見るの、こつちを見るのと、五人七人と組んで下山し出した。それでも酔拂ひ連中は踊つてゐた。

吞助和尚は代人を唯一の相手にして、その踊る人に囲まれて酒のある限り倒れさうになつても呑み続けてゐた。その時助三と言ふ中年の男で、仲々喧嘩好きの一人が、（この男は酒を呑んで財産を無くしたと言ふ者だ）その助三は一見する所、大して和尚程はメートルはあがつてゐない様だつたが踊る人達の間をくぐつて和尚の呑んでゐる處に出しやばつて來た。和尚も代人もこれは良い相手が飛び込んできたと思つて、大喜びで迎へて

「さあ助三、良ぐきた。先づ一杯呑め。それ重ねて呑め。いや三つ杯と言ふことがある。三つ續けて呑め」

などと二人がかりで助三に呑ました。助三はゲタゲタ笑ひながら「こんな氣持の良い日はねい。俺ら毎日こんなごとがあつてければ良いがな。どうだ、延命寺の坊主。賛成だらう、伊藤泰賢め」

と助三は和尚の背中を、どしんと叩いた。

すると平素短氣な和尚は呑んでも矢張り短氣と見えて、急に憤激して來たらしい。大きな聲で

「おんや、何んだともう一回言つて見ろ、この貧乏腐野郎。小さくとも一山の和尚を前にして坊主だ、伊藤泰賢だと呼び捨てするな



んて人を馬鹿にするもんでね」

と怒鳴った。助三は持った杯を置いて

「何んだと馬鹿坊主。俺ら貧乏したつて、んが（お前）どこから只の一粒だつて貰った覚えがあるが、むしろ、こんな貧乏な吾々から毎日何んだかんだと搾つて行きやがつて、その金ためだけつがで、<sup>(78)</sup>おいを貧乏扱ひにするなんて、只にして置がいね。太いナマクサ坊主だ」

酔拂つてゐる助三にも似合はぬ確かりした抗辯だと言ふよりも酔ふて居ればこそ確かりした事を言ふ男であつた。踊を止めてこの喧嘩を聞えてゐる人も出てきた。

「言ふも程がある。ナマグサ坊主とは何んだ。んがばらがら貰つてゐる物は何一つだつてただで貰つてゐる物があるが佛さんが貰ふので、俺れが貰つてあるんでね。この野郎め」

「何んだと良くもゆひけだ。それなら蓄めた小金を全部寺の普請に使つてしまひ。えいナマグサ坊主。それでも慇してあの、てでい（家のアザ名）のアバにふつかげで、何回も孕ましてけつがて、その外に朝のお務めには何處の家さ行ても酒を出ひて小言を言ひがて、この糞坊主。そいでも寺の和尚だと威張られるが。えい」

と助三は口に泡を出して兩手を組んで、極めて落付いてゐた。その時には踊は止めてみんなよつてきた。

「ああ、喧嘩だ。喧嘩だ。助三と坊様の喧嘩だ、これは見るものだ」と言ふ人もあり。

「おら助三お父、良くやてけれ。全くその通りだで。ナマグサ坊

主だと、こつから下いまぐ（轉して）してやれ、やれ」

と後押しする人も出て來た。最初からこの喧嘩を黙つて聴いてゐた部落代人は

「お前達ひば、今日何んの日だと思て、こくたら喧嘩などするものだて。喧嘩はあとも出來るがら止めれ。止めれ。先づ飲め。飲め」

と仲に入つた。その時見物人の中から若い聲で

「喧嘩は何時でも出來るもでね。時不知ず大根であるまいし、今が出來る時だやれ〜」

「その通り盲目鶏<sup>ムツコトリ</sup>。歌ふの時がある。今日一番喧嘩するに良い日だで。喧嘩しねば山洗ひの雨が降らねど、助三負けなよ」

と叫ぶ彌次馬も居た。その時部落代人は

「あだりの者。餘計な口をきくな、何にいらね口きぐて」

と戒めた。郷長達はお互に冗談だと思つてゐるのか、笑つて別に何んとも言はなかつた。

然しこの喧嘩はこの儘おさまる性質のもでなかつた。助三のため斯くまでこきおろされた和尚は、一寸黙つて下を見凝めてゐたが、やがて眞赤な顔をあげた。綺麗に剃られた頭からはばやばやと汗を出てゐた。

「俺あ黙つていれば、何處までも良い氣になつて、無い事も掘り出して、この人中にしやべかる糞野郎。何時んが家に行つて酒出ひて小言をゆた覚えがあるが。まだ俺いどごてでいのアバに孕ましたなんて、俺いの人格を汚すも程がある。んが、實際のごと見だが。

うん、この博突打め。親にも子にも食はひる米ねても、博突打てばおもしろが。うん、そのじや（まぎ）ま見れがれ」

と和尚は助三の方へ詰めよつて行つた。

「何んだと、この馬鹿坊主。たわけがて、俺どさかがてくるてが。ん。かがらばかがればいでね」<sup>(79)</sup>

と助三は手をひろげた。その時、代人は愈々組打ちになると見たのか

「そんな馬鹿な眞似するもでね。助三がこのたび引こめ」

と助三に命じながら二人の中に入つて続けて言つた。

「郷長達。おめがだこの助三どごそちや、つでいてけれ。雨乞して喧嘩したなて、外の村で笑はれるでおめがだ」

「なあに、かまわねでおけひでや。代人さん」

と見物人の一人は言つた。その時既に和尚は助三の胸もとを左手で掴んで、右手の掌で助三の頬べたを、バアンと一つなぐつてしまつた後だつた。助三は目に見えない程の手早さで、側にあつた酒の一升壺を右手に握つて立ちあがつた。瞬間的に郷長の一人は素早く助三の右手を捕えた。けれども助三も小型ながら強力者、一人ではとても完全に押さいきれぬ。

「うん、この野郎。俺を叩だだなあ。さあこの野郎どご殺してやるから。んがばら離ひ」

と助三は、持つた一升壺を力一ぱい和尚の頭へ打つた。私はぱつぱつと水引時の喧嘩の場面を思い出し乍ら夢中になつて和尚の頭を見てゐた。その時郷長達は全部助三と和尚に取りまといつてゐた。

頭へ壺を打ちつけられた和尚は、アツ、アツ、アイタと自分の頭を両手で抱えた。それでも陶器の厚い一升は割れなかつた。既に、赤くなつてゐたテルテル坊主頭には更らに赤い物が左耳の方へダラダラとのろく流れてゐた。これを見た見物人は、一斉にあつたと聲を出して全く啞然とした。其の時郷長達は二人を完全に引離して、助三を見物人の外に連れ出した。それでもは助三は益々荒らくなつて

「うん、離ひ。どうひこうひ、あの野郎を俺ら殺してやるがら」

と威丈高になつて我張つてゐた。

「何んこの馬鹿。雨乞だでね。人に傷つけで何んとしもんだ。

もう止めれ。止めれ。大人げねい。止めれつたら、うん助三」

と郷長は叱る様にして引止めてゐた。あとの郷長達は見物人から手拭を三本取つて和尚に手當をしてゐた。

「うん、のこれいであ（口惜しい）あの野郎。俺のこの頭を傷めだなあ。覺べで居れ。あの野郎の親が死んでも行がねがらな法事にゆかねがらなあ。さう思ひ、あの野郎」

と和尚は涙を流して言つてゐた處を見ると、さう大して傷は大きくはないらしい。が、三本の手拭でまるめられたてゐる坊主頭から矢張り少しは血が滲んでゐた。代人は

「誰いがそのあたりから蓬の葉を持つてけい」

と叫んだ。そしたら村人が六七人どやどやとその邊を走り廻つて探した。オダマアバは手早く探し出してきて、代人の手に渡した。

代人はそれを郷長の一人に手渡しして、

「これを揉んで傷口につけれ」

と命じた。郷長は兩方の手で盛んに揉んで、和尚の頭の手拭を取り除き、傷口へそれをつけてやり、そして更らに二三本の手拭で頭を丁寧<sup>ニヤヤ</sup>に纏帯してやつた。

「ああ、氣<sup>キ</sup>焼<sup>ヤ</sup>げる。あのふと殺しめ、うん」

と和尚は胡坐をかき、兩方の手を胡坐の上に置いて、齒切りしながら怒鳴っていた。代人は、石祠の上のワカメにかけの水がまだ少しは残つてゐたので、その水を最前御幣を濡らすためにあげて置いた器物に入れ、その水で、和尚の耳のあたりについた血を紙を濡らしてふぎ落してやつた。代人までもかうして置かれぬと見えて、郷長二三人を連き添はして和尚をなだめながら下山させようとした。しかし和尚は

「俺ら死んでもこから動がね。かまうな」

と頑張つたが、結局連れ出されて右に二足左に三足、前に三足後に二足と、酔ばらひ獨特の歩き方をして引擦り下された。けれども下り足なので、そんなに時間もかからず姿は見えなくなつた。一方助三は、和尚よりも先きに親類者や、自分の妻やまた長男などのため

「この馬鹿で。まああんなごするも程がある。えい。この親子の面汚し。飲<sup>ツグ</sup>らたつたらこんな業<sup>ゴウササ</sup>晒<sup>サシ</sup>するもの。早くあべがれ」と背中をごしんごしん叩かれたりまた叱<sup>ツ</sup>かれたりした、が、助三は黙つて

「うん、うん、んがばら何におべでゐるて」<sup>(80)</sup>  
と返事か唸りか知らぬが、そして矢張り和尚の様な足つきで歸つ

て行つた。

### 三

「かうした場面をしばし啞然と見てゐた村人は、最初のランチキ騒ぎも全く天に飛び去り、少しばかりの酒の酔はもうとづくに覺めてゐた。そして五人十人と各自のものと處に戻つて下山の準備を始めた。そしてこそこそと語るのであつた

「てでいのアバなんか、あの坊主頭叩かれた時側で見てゐたら何んな心持したべなあ。幸ひ下の方に居つて知らねがたものなあ」と金四郎アバが言つた。

「したとも、助三はこんな時でねば、日頃のど腹<sup>ハラクソツ</sup>糞<sup>クソ</sup>惡<sup>クソ</sup>りのをはださいねどもて、やつたべい。あいは村の代理になつてナマグサ坊主を懲<sup>ツ</sup>しめだの<sup>ツ</sup>で、良かつたで、ほんとの部落代人だであれ」と一人の若者は言つた。

「あの坊様つたら、ほんとねおなご見れば、大に糞<sup>クソ</sup>見<sup>ミ</sup>い<sup>イ</sup>だも同然でなあ。油斷がならねもの。なあに知らぬふりしてゐるだて、あのでいのアバの最初の子も今になれば、あの坊様の面にそつくり良<sup>ヨシ</sup>く似た子でねいが、その外に蠶<sup>グワマメ</sup>豆<sup>マメ</sup>家のアバだて、米貫て食てゐるし。あれまだ良く孕まねして良いものなあ」

とオダマアバは言つた。

「なあに、その實、オダマアバだその手に乗てゐるべひ、ふとど<sup>(82)</sup>ごだば鬼<sup>キ</sup>なてようたて」

と唐治は言つた。そしたら、オダマアバは其處にあつた小石を拾

つて、

「この馬鹿けめ。何んでもしやればいいと思て、何に俺らだけそんなごあるもだて」

と小石を投げつける態勢をとつた。その時唐治は素早く

「ああ負けた。負けた。みな嘘だ」

と叫んで逃げて行つた。

「俺ら家になんかきて、朝飯時に、飯は毎日の事であるし俺らウドン好きだからウドン買てきて食ふひれて、あの坊様言つて困つた事があつたけなあ」

と一人のアバは言つた。かうして散々延命寺の和尚を非難して、今日の喧嘩はむしろ、助三に味方する者が大部分であつた。斯くして村人は太鼓や石油罐を叩きながら、また空になつた重箱を手になら下けてぞろぞろと下山し始めた。

私と耕三の二人はこの序でに夕日が遠い水平線に入るのを見ることに決めて居残つた。二町五町と自分等の處より離去るその村人の姿が段々と小さくなりやがて見えなくなる頃に私共は何んだか一人離れ小島に残された様な、言ひようのないもじもじした淋しい寒波が全身を動かしたのであつた。私と耕三は全く腹の中の物が出はしまいかと思ふ程ありつたけの聲を出して、歌をうたつた。今までの水引の苦痛も今日一日ですつかり快復したかの如く元氣になつてゐた。

「今一週間だよ、我慢するのめ」

と耕三は言つた。だが私は、こんな雨乞なんて一つの迷信だと片

付けてゐたが、然しほんとに苦しんでくると迷信とは知りつつも一週間経てば必ず降るんだ、といふ一つの信念を得て、せめて一週間でも安心した苦痛のない生活をしたいといふ氣持が私の脳髓を襲ふてゐたのであつた。

かうして考ひ込んだり、歌つたりしてゐる時六時二十分の汽車はトンネルをくぐつて船川へ走つた。宇宙の光線は薄くぼんやりしてきた。半島の各村々からは、夕煙がたなびき出した。他村の草刈り人馬は列をなして廣い芝草の野原をたくたくと、自分の村の夕煙を目當に下つて行つた。また船川港の汽船は時々驚くやうな太い汽笛を山々に響かした。日は正に西山に没しと言ふことがあるが、こいでは、日は正に西海に没してである。キラつく光線が無くなり日がぼつかりと赤くなり、それが段々と水平線近くなるに従つて日の丸が大きくなるといふ現象が不思議に感じられてならなかつた。そして遠くの水平線に没せんする時の日の丸の雄大さ。同時に見ている私の全身が引込まれるやうな一種異様な怖しい氣持に襲はれるのであつた。その雄大な日の丸が刻々と水平線に没してゆく様は世の豫言者が次代に於て、再び相合ふぞといふて歿せんとする様な感想を起さすのである。

やがて日は全く没した。と同時に何にか迫れる様な氣持で、私共二人は後をも見ずに下山し出した。山の西側の方はまだ相當明るかつたが下山する方向の東側はすつかり暗くなつてゐた。二人は夢中になつて走つた。その時中腹の梨の木平のあたりに二匹の狐がびいんびいんと反對に山頂の方にはねてくのを見た。狐を見た私共は一

層屍が擱まれる様な思ひをして夢中になつて走つていった。(未完)

注

- (46) 墓所：仏壇
- (47) 物置：総恵氏にとってはナマハゲが来た時に隠れる場所だった
- (48) だ、屍みたいだ：誰が屍こいた
- (49) 辛棒な：しみったれな
- (50) 手拭の被りあべ(鹽梅)ばかり良くて：見た目の恰好ばかり良くて
- (51) カント米：外米。総恵氏の母の実家は地主だったが、父(三郎)の実家は小作もやっていた。
- (52) 其のうつまた：そのうえまた
- (53) あぎいだなあ：あきれたなあ
- (54) きどごね：普段着のまま寝る
- (55) タゴ：飼葉桶
- (56) いあべに：いい塩梅に
- (57) てもどね：だからこそ
- (58) えめじ：延命寺
- (59) アマ犬：狛犬
- (60) 浪子の小説：徳富蘆花『不如帰』
- (61) あるびし：あるはずがない
- (62) のがねべ：逃げて行かないだろう
- (63) 一の目：一ノ目潟。男鹿半島にあるマール(爆裂火口)の湖
- (64) 眞餅：白い餅。その他ヒエ餅、黒豆餅、ヨモギ餅などがあった
- (65) よごしが：寄こした

- (66) 目腐金一文けねもの：はした金一文たりとてくれなもの
- (67) くだらまでかだあじ：癪に触って管を巻きたくもなるよ
- (68) ふどげれ：一回
- (69) 何んぼあでひだあじだて：どれくらい入れた味か
- (70) そくたばし：それくらいばかり
- (71) ひだもひねも：入れたか入れないか
- (72) 代人：代表
- (73) こひだ：こしらえた
- (74) 南磯：男鹿半島西部の漁村
- (75) けんたい振るな：いばりくさるな
- (76) ○○：原文二字空白(伏字)。
- (77) 天王の祭：東湖八坂神社例大祭。この統人行事は重要無形民俗文化財に指定されている
- (78) 金ためでけつがで：金貯めやがって
- (79) かがらばかがればいでね：かかってくるならかかってこい
- (80) んがばら何におべでゐるて：お前に何がわかるか
- (81) その手に乗てゐるべひ：その一味だろう
- (82) ふとごだば：人のことなら
- (83) 食ふひれて：食わせると